

「実録・連合赤軍あさま山荘への道程」などで知られる若松孝二監督が、反戦への強い思いを込めた映画「キャタピラー」。主演の寺島しのぶが第六十回ベルリン国際映画祭で「銀熊賞（主演女優賞）」を受賞して話題になった。若松監督と話す機会があった。「戦争が起きたら確実にあなたも死ぬ。そのことを伝えたい」と監督は語った。

村人の見送りを受けて戦地に赴いた黒川久蔵（大西信満）が軍のジープに乗せられて妻シゲ子（寺島）のもとに還ってきた。戦闘で四肢を失い、顔のやけど跡が痛々しい。イモ虫のような体を軍服に包み、胸に金ぴかの勲章をぶら下げる久蔵。村人たちは「軍神様」と呼び、拝むように接する。自分では動くことが出来ない久蔵は「食欲」と「性欲」をむき出しにして生きる。献身的に仕えるシゲ子には、やがて、違った思いが芽生える。農家の「嫁」として家に縛られ、「子を生まない女」と夫の暴力に耐えた日々。気がつくくと、シゲ子は「軍神様」を張り飛ばしていた。

「キャタピラー」の劇場用パンフレットによると、若松監督は一九三六年宮城県生まれ。太平洋戦争末期、空襲で燃え上がる仙台市の夜を在所で見たのを覚えている。十七歳で高校を中退して上京。東京・新宿ではちよっとコワモテだったらしい。新宿の映画のロケ現場で用心棒を引き受けたのがきっかけで、間もなく「足を洗って映像の世界へ……」と経歴は語る。「戦争はただの人殺しだ」。二十二歳の助監督として

忘れるな、これが戦争だ

「太平洋戦争とひめゆり部隊」の関連資料を集めたのが「戦争」を問い直す契機になったという。あの大戦を「お国のため」と語る人々がいた。「戦艦大和の最期」をロマンチックに脚色する映画もあった。

「女性と子どもが真っ先に殺される。それが戦争だ」と若松監督は語った。一九八二年に訪ねたレバノンのパレスチナ難民キャンプを忘れることが出来ない。「女性と子どもたちの遺体が折り重なって異臭を放っていた」「子どもを生む女性は真っ先に殺されるのです」。兵士に母親が強姦されて、殺される。その惨場を心に焼き付けた幼い子どもが、いつか、復讐の銃をとる日がくるだろう。「女性と子どもたちを真っ先に殺害するのはそういう意味でしょう」。記憶の連鎖を断ち切るために子どもたちが真っ先に標的にされる、そんな世界がある。

「連合赤軍」の撮影中に考えた。七〇年代を激しく駆けた若者たち。銃砲店から奪ったライフルを抱えて厳冬の軽井沢の別荘に立てこもる。「機動隊と銃撃戦を繰り返す若者の姿を撮影しながら、私は彼らの親の世代の責任を考えていた」。

太平洋戦争で日本は決定的に負けた。しかし、その後の道行きには「なんの反省もない」と監督は話した。戦後日本は、六七〇年代にアメリカのベトナム戦争と深くかわり、今、イラク戦争やアフガンの戦いでも役割を担っている、という。

「戦争」は昔の話ではない。一片の召集令状（赤紙）で駆り出された久蔵ばかりか、

銃後のシゲ子の人生までを容赦なく踏み潰す。今、戦争の記憶を遠くに流そうとする日本と日本人に「忘れるな」と映画は問いかける。「化粧をすると体が演じてても、皮膚が演技をしない」「彼女はずっとスツピョンで演じてくれました」と監督は寺島しのぶを語った。「兵士の妻」シゲ子を演じた寺島が国際舞台で高く評価された背景には、六十五年のかなたに去った戦争への共通の憤怒があるのかも知れない。

「キャタピラー (caterpillar)」は「イモムシ」の意味だ。物語の終わりに主題歌「死んだ女の子」（歌詞||ナジム・ヒクメツト、訳詩||中本信幸、作曲||戸山雄三）が流れる。奄美大島生まれの歌手、元ちとせが島唄の調べで低く高く、哀切を込めて、原爆で死んだ七歳の女の子を歌う。「キャタピラー」は八月六日に広島、九日に長崎で上映が始まり、十四日から全国公開されている。

「ピースって、皆さんもカメラに向かって指を立てることがあるでしょう?」

それが「核兵器」を象徴しているのだと、最後に若松監督はそんな話を持ち出した。あのピースは日本に投下した原子爆弾によって「やっと平和がやってきた」と、戦いに勝ったアメリカ兵たちが真っ先に示したハンドサインなのだ。ピースサインの指の一本はヒロシマ、もう一本がナガサキ。一九四五年夏に人々を焼き尽くした核の爆弾を象徴していると。監督の話を反芻しながら、北国の暑い夏を過ごした。(圭)